



上智大学創立 100周年
 上智短期大学創立 40周年
 上智社会福祉専門学校 50周年



戦艦ミズーリ号

No. 14

1.3 人の従軍司祭が上智大学にやってきた

1945年3月10日、アメリカ軍の戦略爆撃機B29による東京大空襲が行われた。上智大学でも、4月13日の空襲で赤レンガ校舎が焼失、1号館の講堂が焼けた。5月25日の空襲では大学近辺の日本家屋がほぼ全焼した。当時の模様をブルーノ・ビッテル神父は次のように伝えている。

「ひとつの校舎は完全に焼け落ち、もうひとつの校舎も一部は破壊しましたが、資材が入手でき次第修復は可能です。大学の周辺は全くの焦土と化し、私どもだけが廃墟の真中にちょっとした平和の孤島のようにそびえたっております」

そのような中でわずかな大豆と米、時々入手できた肉の切れ端で命をつないでいたイエズス会員たちが身を挺して上智大学を守っていた。そして8月15日玉音放送が流れ、天皇の言葉が疲弊した

日本人の胸を打った。9月2日東京湾内のアメリカ海軍の戦艦ミズーリ号艦上で、日本は降伏文書に署名して太平洋戦争は終わった。

実はこの戦艦ミズーリ号は上智大学と深く関わっている。戦艦の中には従軍司祭がいた。戦艦ミズーリに乗船していたポール・オコンノー神父とチャールズ・ロビンソン神父である。そしてもう一人水上機母艦ハムリンに乗っていたS. H. レイ神父である。彼らは横須賀に上陸すると、9月5日にジープに乗って食糧と衣類を持って上智大学にやってきた。ロビンソン神父は、関東大震災の直前に来日し、上智大学で教鞭をとったことがあ



連合国側と日本の降伏文書調印式が行われた戦艦ミズーリ号(戦艦ミズーリ博物館資料)



1945年4月13日未明の大空襲で焼けた赤レンガ校舎(上)と4月15日の朝日新聞記事(下)



った。帰国後はセントルイス大学で日本語を教えていたが、1943年に従軍司祭として海軍に入隊していた。こうした関係から、残っているイエズス会員と上智大学がどうなっているのかを心配し、約1週間分の食糧を届けてくれたのである。

2. 食糧でなく優秀な人材の派遣を！

しかし、彼らが見たのは、全員栄養失調で健康を損なっていたにもかかわらず、大学をすぐにも再開

したいというイエズス会員の熱心な意気込みであった。ポール・オコンノー神父はアメリカのマー神父宛にこう述べている。

「彼らに欲しいものを尋ねましたところ、その要求は食糧でなく人材でした。もし適（かな）うなら、英語を教えたり、日本の再建に携わる知識階級に影響を与えられるような若いアメリカ人のイエズス会員が欲しいとのことです。・・・食糧ではない、彼らのこの第一の要求は何よりも胸を打つものでした。」

戦後の焼け跡の孤立悄然とした中で「日本の再建に携わるイエズス会員が必要だ」という要求が、アメリカだけでなく全世界を駆け巡った。1947年11月には、



ダニエル・マッコイSJ(学生と)

ジョン・ブルウェット、アロイシャス・ミラー、ロバート・フォーブス、ダニエル・マッコイの4神父が第一陣として上智大学にやってきた。

ブルウェット神父は教育学科で、フォーブス神父は英語学科で教鞭をとった。ミラー神父は英文学を教え、また国際部の設立にも尽力した。マッコイ神父は生物学の授業を担当した。その後は全世界から多くのイエズス会員が上智大学に派遣された。第7代学長ヨゼフ・ピタウ神父、第12代学長ウィリアム・カーリー神父などのイエズ

ス会員が派遣され、上智大学の精神的な発展の支柱となった。



上智大学にやってきたポール・オコンノーSJ、後にアメリカのザビエル大学学長となる



アロイシャス・ミラーSJ



ロバート・フォーブスSJ